

科目担当者氏名		科目担当者連絡先（メールアドレス）	
小林大祐			
連絡責任者氏名		科目設置機関名	
小林 大祐		金沢大学 文学部 人間学科 史学科 / 人間社会学域 人文学類 人間科学コース・フィールド文化学コース	
授業科目名	科目認定番号	受講者数	
社会調査発展演習A	KNZa-160801-2	9人	

I. 調査実習に関するコメント

学生が果たした役割や実習全般に対する感想など：

2016年度の調査実習科目で実施した調査は、今後実施することが構想されている若年層を対象とする国際比較調査の質問項目検討を兼ねたものとなっており、調査会社に委託したインターネット法によって実施された。このため、学生は実査にともなう作業を行うことは無かった。その分、リサーチクエスチョンを仮説にして、最終的に質問項目にまで仕上げていくプロセスについては、かなりの時間をかけて学生に主体的にやってもらった。学生たちは3つの班に分かれて、それぞれのテーマについてよく議論を行い、納得のいく質問項目を作成し、分析を進められたのでは無いかと思っている。

II. 調査の企画・設計（デザイン）

1. 調査のテーマ／領域：

若年層のつながりと価値意識について

2. 調査の内容／概要：

調査の名称は「つながりと暮らしについてのウェブアンケート調査」で、現代の日本社会における若年層（18歳から34歳層とする）の意識、価値観、行動の特質について調査を行った。特に趣味嗜好、人間関係ネットワーク、SNS利用に重点を置き、これらの項目と価値観項目との関連のありかたを、中年世代（35歳から49歳層）と比較することで、若年層の価値意識の特徴を明らかにすることを目的とした。

3. 調査の範囲／対象（量的調査の場合は母集団と標本数及びサンプリングの方法を、質的調査の場合は対象者選定の理由を必ず記入）：

調査の範囲：全国 調査対象：調査会社の登録モニターのうち、調査時点で18歳から49歳の男女

4. 主な調査項目：

SNS利用について、社会的ネットワークについて、趣味内容について、価値意識について

III. データ収集の方法と結果

5. データ収集（現地調査）の方法：

インターネット法

6. 調査の実施時期・調査地・調査員の数：

調査の実施期間：2017年1月20日（金）から24日（火） 調査地：全国 調査員の数：委託調査なので該当しない

7. 収集したデータの量と質への評価（量的調査の場合は有効回収票及び回収率を必ず記入）：

有効回収サンプルは1400。ただし、調査会社の登録モニターに対して、調査依頼を行い、基本属性の人口比で層化した割付数に達した時点で回答を締め切るため回収率は計算されない。このため、当然全国の18歳から49歳の男女という想定母集団からのカバレッジ誤差が生じている可能性が高いことに加え、登録モニターからの無作為抽出も行っていないのでその代表性も担保されてはいない。実際、官庁統計データとの比較では、学歴が高く偏っている傾向が示されている。

IV. データ分析の方法と結果

8. データ分析／解釈の方法：

主に多変量解析による、仮説検証型の分析による。

9. 調査の成果（調査から得られた主な知見など）：

主なものとして2点をあげる。

まず、SNS利用が与える影響についてである。Twitter疲れの2つの側面について、それらを規定する要因の分析を試みた。このうち、Twitter有用感については、積極利用と有用感に相関が見られた。また、現実の所属コミュニティの多さや地元への結びつきの強さがTwitter疲れにつながっている可能性が示唆された。これらが本当にTwitter疲れを増幅させる要因となつていれば、「現実の人間関係」と「SNSの人間関係」の強い結びつきを示すことになり大変興味深い。

次に、「若者の右傾化」についてである。年齢との相関では、年齢が高いほど右翼傾向が高く「若者の右傾化」とは本調査では言えなかった。また、中国や韓国への嫌悪は生活満足度と負の相関があったものの、ネット書き込みについては実名書き込みとの負の相関のみが認められた。したがって「生活満足度の低い人が特定の国を嫌悪し、ネット掲示板などに書き込む」といったネット右翼像は本調査からは導き出されなかった。

10. 報告書刊行の予定と概要：

受講生が個々のテーマで分析を行った結果のレポートを2017年3月にとりまとめているが、今後更に分析を重ねて2018年3月に冊子体の最終報告書を刊行する予定である。